

る、などである。

本シンポジウムでは、これらの問題点とその対策について実例を呈示し、さらに最近開発した RIA(成長ホル

モン放出因子、心房性ナトリウム利尿ホルモンなど)の有用性と今後の展望について述べる。

2. リセプター・アッセイの基礎と応用

東京女子医大・内分泌センター内科

對馬 敏夫、佐藤 雄二、江本 直也

ラジオリセプター・アッセイ (RRA) は、ラジオイムノアッセイ (RIA) と同様に competitive radioassay の一つである。RIA との根本的な相違は、RRA が受容体への結合というより、生理的な反応を用いている点である。ペプチド性ホルモンの RRA で用いられる受容体の形としては単離細胞、細胞膜を含む粗膜分画、純化膜分画あるいは可溶化受容体等があり、目的に応じて使い分けられる。標識ホルモンは生物学的活性を失っていないことが必要である。RRA によって各種ホルモンの測定が可能であるが、受容体の親和性は抗体のそれに比して弱いために、感度の点で RIA に劣る。また、特異性の上でも RIA より劣ることが多い。しかし、これが逆に利点となる場合が存在する。例えば、インスリンの RRA によって他のインスリン様物質を測定することが可能であり、また、GH の RRA によって RIA では不可能である GH 様物質を測定することができる。このように未知物質の発見やその測定に有用であり、さらにホルモン

の結合阻害を指標とすることにより、あるいは免疫沈降法によってホルモン受容体に対する自己抗体の検出法として優れている。ホルモンその他の生理活性物質の生物活性の検定、ホルモン構造と機能との関係についての研究手段としても有用である。ホルモンの血中濃度の測定系としては RRA は不利な点が多い。しかし、受容体の down regulation を利用した modulation assay では RIA と同様の感度を得ることが可能であり、IM-9 細胞を用いる hGH の測定が行われている。この測定法で得られた値と RIA での値に差のある場合が存在し、構造異常をもつホルモンの存在が示唆される。臨床的には、RRA の技術は患者自身の受容体の解析に用いられる。これによって受容体の異常を確認することができる。また、悪性腫瘍組織におけるホルモンあるいは成長因子の受容体の有無が、腫瘍の悪性度の判定あるいは治療方針の選択に用いられることがある。以上、RRA の基礎的事項およびその応用技術につき述べる。

3. ラジオリセプター・アッセイによるリセプター抗体の測定

京大・核医学科 小西 淳二、笠木 寛治、飯田 泰啓

ラジオアッセイの臨床応用により、これまで原因不明であった幾つかの疾患にリセプター抗体が関与していることが明らかにされてきた。その代表的なものは重症筋無力症、インスリン抵抗性糖尿病 (B 型)、パセドウ病などである。これらのうち、パセドウ病にみられる TSH リセプター抗体の測定は、リセプター・アッセイのキット化により急速に普及しつつある。そこで、この方法による TSH 結合阻害抗体 (TSH-binding inhibitor immuno-

globulin, TBII) 測定の問題点を、他のラジオアッセイによる抗体測定と対比して検討するとともに、リセプター抗体測定の臨床的意義を評価した。

リセプター・アッセイによる TBII 測定の問題点について。① 感度：未治療パセドウ病での検出率は 90% 前後に上昇してきたが、なお感度は十分といえない。アッセイ条件の改良によって感度の向上が得られた。② リセプター抗体の生物活性を反映しない。培養甲状腺細胞を用